

好まれる事態把握と移動表現
— 実況中継における移動表現と視点に関する一考察 —

多々良 直弘

An Analysis of Sports Announcers' Expressions of Motion Events
in Football Games
Preferred Construals and Descriptions of Motion Events in English and Japanese

TATARA Naohiro

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第5号 2014年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Fifth Issue, March 2014

キーワード：移動表現、直示表現、視点、事態把握、実況中継

Abstract

This article examines sports announcers' expressions of motion events in football games in English and Japanese. It is often said that English speakers tend to situate themselves outside of the situations to be described and construe the whole event objectively. Japanese speakers, on the other hand, have a strong tendency to construe situations subjectively and describe them from within the scene. Previous studies revealed that these tendencies can be observed in a variety of linguistic phenomena with English speakers and Japanese speakers often adopting different linguistic expressions to describe the same situation. This paper investigates how these tendencies are reflected in descriptions of motion events in live coverage of football games.

1. はじめに

本稿は、人間とボールが常に移動し続けているサッカーの試合の実況中継を例に挙げ、その中で使用される移動事態の表現方法を分析し、日本語と英語における表現の特徴と視点の取り方を考察していくことを目的とする。移動は人間にとって最も基本的な出来事の一つであり、移動事態が各言語でどのように表現されるのかということは非常に興味深い問題である。このような移動表現は、これまでTalmy (1985、1991) を中心に様々な理論的枠組みにより分析が行われてきた。Slobin (1996) はTalmyの類型をもとに、英語とスペイン語の話者が移動事態をどのように表現するのか絵本を使った実験調査を行い、各言語の移動動詞の特徴により話者が事態のどの部分に注意を向けているのか分析している。松本 (2012) は動画を使用した実験を行い、各言語の話者が目の前で起きている移動事態のどの要素に注目して表現するのか分析を行っている。本研究は、サッカーの実況中継というジャンルの中で、いかに話し手であるアナウンサーが視聴者に対して臨場感のある中継を行っているのかということ、移動表現を通じて考察するものである。

2. 移動表現の対照研究

2.1 移動動詞の類型

移動表現は、松本 (1996 : 126) が指摘しているように、空間表現とともに「言語表現の中でも最も基本的なものの1つ」であり、「広く言語表現一般の性質を知るための重要な手がかりになり得る」ものである。松本 (1996:126) は移動の概念を以下の通り定義している。

移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である。したがって移動には移動物、移動の経路、そして移動の継続時間が存在する。この3つが移動を規定する必須要素である。

Talmy (1985) は英語やスペイン語などを例に、世界中の言語における移動動詞の特徴を分析し、普遍的な移動動詞の類型を示した。Talmyはこの類型において、移動の事態は、Figure (図、移動物)、Motion (移動の事実)、Path (経路)、Ground (地、参照物)、Manner/Cause (様態・原因) の5つの要素から構成されていると想定し、各言語における移動動詞は移動の事実とどの要素を動詞に内包するのかにより構成されていると指摘している。例えば、スペイン語、その他のロマンス系の言語、日本語などでは、移動の事実と移動の経路を合成した動詞が多く、このような言語では移動の様態は他の要素で表現されたり、表現されないこともある。2つ目として、移動の事実と移動の様態が合成されるタイプがある。英語やドイツ語などのインドヨーロッパ系の言語では、この種の動詞が非常に多い。

- (1) The bottle floated into the cave.
- (2) La botella entró a la cuave (flotand) .

(1) の英語と (2) のスペイン語はそれぞれ同じ出来事を描写している表現だが、英語の動詞には移動の事実とボトルがどのように移動したのかという様態が内包されている一方で、スペイン語の動詞 *entrar* には移動の事実とその経路が内包されていることがわかる。もちろん、英語にも基本的なパターンではないが、経路や方向性が包入されている動詞は存在するが、それらは主にロマンス系の言語からの借入によるものである (松本 1996)。

Talmy (1991) は「動詞枠づけ言語 (verb-framed language)」と「付随要素 (衛星) 枠づけ言語 (satellite-framed language)」の2つの類型を提示している。この類型では、移動事象の基本構成要素のうち、方向や着点などの経路がどの言語的要素によりあらわされているかに注目した分類であり、経路を付随要素 (動詞と共に起して付随的意味をあらわす文法カテゴリー) である前置詞であらわす英語は「付随要素枠づけ言語」に分類され、スペイン語や日本語は動詞で経路をあらわす言語であり「動詞枠づけ言語」に分類される¹。両言語の違いは複数の経路を含む移動事態を表現する際に特に顕著となる。

- (3) Bill threw a ball out the window over the fence and across the street.
- (4) ビルはボールを窓から投げた。そのボールはフェンスを越え、通りを横切って行った。
(松本 1997: 157)
- (5) He walked down the hill across the bridge and through the pasture to the chapel.
- (6) 彼は丘を降り、橋を渡って、野原を通ってそのチャペルに行った。 (松本 2012)

このように英語では経路は前置詞であらわされるため、(3) と (5) にあるように動詞は *throw* と *walk* のみが使用され、複数ある経路は前置詞句の連鎖により表現される。一方で、日本語では経路が動詞で表されるため、(4) と (6) のように複数の動詞が使用されるため節の連鎖となる。

2.2 実験による移動表現の対照研究

Slobin (1996) は英語とスペイン語などを母語とする子供を対象に、さまざまな移動事態が含まれた絵本 (*Frog, Where Are You?*) を見せ、それを言語化してもらおうという実験を行った²。その結果、英語とスペイン語の被験者は同じ移動の出来事を異なる言語表現を使用して表現していることがわかった。(7) と (8) の文は英語を母語とする5歳児の表現であるが、移動の様態に注目し動詞で移動の様態を述べ、方向や経路は前置詞で表現されている。一方スペイン語話者は (9) にあるように、移動の様態ではなく、経路を中心に表現する傾向が明らかになった。

(7) And then the deer carried him over a cliff and threw him over the cliff into a pond.

(8) The bird flew down out of the hole in the tree.

(9) El pájaro salió del agujero del árbol voland hacia abajo.

‘The bird exited of the hole of the tree flying towards below.’ (Slobin 1996:83)

松本 (2012) は、様々な言語話者が同じ移動事態をどのように言語化するのか、その傾向を調べるために、実験を行っている。この実験で松本は人間の移動を録画した動画を被験者に見せ、様々な言語において移動の事態を構成する移動の様態、経路、直示のどの要素が優先的に言語化される傾向があるのか調査した。この動画は図1にあるように、動画を見ている被験者に向かって移動する映像 (TWRD S)、被験者から離れる映像 (AWAY FROM S)、被験者の前を横切っていく (被験者から離れている場所から離れている場所に移動する映像) (NEUTRAL) などがある。

以下の文は、動画内の移動者がカメラに向かって (つまり被験者に向かって) 移動してくるものを被験者が言語化したものである。

(10) John walked toward me.

(11) John came walking.

(12) ジョンが歩いて入って来た。(松本 2012)

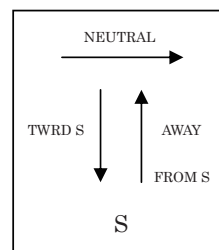


図1. 松本 (2012)

英語では移動の経路が前置詞などの付随要素で表されるため、その他の二つの要素である移動の様態と直示的要素のどちらかが動詞によって表現されなくてはならない。松本はこの状況のことを移動の様態と直示的要素が競合している (compete) と表現しているが、(10) では様態が優先的に表され (win out)、(11) では直示要素である come が優先されていることがわかる。一方、日本語は (12) にあるように様態、経路、直示的要素全てが動詞により併記することが可能である。つまり、移動事態を表現する際に、英語のようにそれぞれの要素が競合するのではなく、どの要素を表現しないのかということが問題となるのである。

松本 (2012) では、日本語の被験者はほぼ全ての動画において主要部 (動詞) には直示的要素が使用されているのに対し、英語の被験者はたとえ自分の方に移動者が移動する映像でも come という直示動詞を使用せず、主要部にはほぼ全て (10) のように walk や run のような移動の様態を表す傾向が明らかになった。つまり、英語では主要部に経路や直示的要素は表現されず、様態を動詞で、経路を付随要素で表現することが確認された。

また、この実験によると、英語話者がこの実験において come という直示表現を使用するのは、単に移動者が被験者の方に向かってくるのではなく、移動者が建物の2階から被験者のいる1階へ降りてくるというような場所の共有 (sharedness) や、移動者がカメラに向かって (被験者に向かって) 微笑みかけたり、声をかけたりするなど何かしらの相互作用

(interaction) が認められる時に、その使用の傾向があがると述べている。つまり、自分が関与していない、違う世界で起きている出来事を描写する際には、英語は直示的要素を使用しないのではないかと松本は指摘している。

3. 日本語と英語における好まれる事態把握と移動表現

3.1 主観的把握と客観的把握

我々がある事態を言語化する際には、話者がその事態をどの視点からどのように把握するのかということが、言語表現に反映されていると認知言語学の分野では考えられている。言い換えれば、各言語における言語的な特徴は、それぞれの言語文化によって特徴的にみられる事態把握の仕方によって生み出されているということが出来る。

池上 (2007) は、英語ではある事態を言語化する際に、「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をするが、日本語では「話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」と述べている。本多 (2005:154-155) も同様のことを述べていて、「英語は状況を外部から見て表現する傾向が強いのに対して、日本語は状況の中にて、その現場から見えたまを表現する傾向が強い」と述べている。このような英語と日本語において好まれる事態把握である客観的把握 (objective construal) と主観的把握 (subjective construal) が両言語の言語的な傾向を作り出しているということが出来る。

この両言語の好まれる事態把握が移動という人間にとって非常に基本的な出来事を描写する際の差異を生じさせていると考えられる。以下の『雪国』の冒頭の文を見てみよう。

(13) 国境の長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった

(14) The train came out of the long tunnel into the snow country.

(13) の日本語の文は、池上 (2007 : 195) などでも指摘されているように、汽車に乗っている登場人物の視点から、つまり主観的に情景を把握し、その場に臨場し、体験的に描写した文である一方、(14) の英語はオフ・ステージから客観的にトンネルから汽車が出てくる出来事を描写した文である。このように、両言語で好まれる事態把握の仕方が、翻訳にも反映されている。

3.2 好まれる事態把握と移動表現—翻訳にみる両言語の移動表現

Tani&Tatara (2012) では小説 *Holes* (by Sacher) とその翻訳 (『穴』) を比較し、同じ出来事を英語話者と日本語話者が異なる視点から状況を把握し、描いている事を示している³。ここで翻訳を使用している理由は、もし日本語話者がいる状況をその場に臨場する形で主観

的に把握し、描写しているのであれば、英語で客観的な視点（神の視点）から描かれた移動表現を日本語に翻訳する際に影響があると考えられるからである。

(15) The shovel felt heavy in Stanley's soft, fleshy hands. He tried to jam it into the earth, but the blade banged against the ground and bounced off without making a dent. The vibrations ran up the shaft of the shovel and into Stanley's wrists, making his bones rattle.

(16) スタンリーの丸々としたやわらかな手に、シャベルはずしりと重かった。地面に押しこもうとするのだが、がつんと刃先が当たったとたん、これっぽっちのへこみもできずに、そのままはね返されてくる。振動が柄から手首に伝わってきて、体中の骨ががくがくした。（下線は筆者）

この例で観察される顕著な違いは下線部の bounced off と ran up の箇所である。この両者の日本語訳は原文にはない直示表現である「くる」という動詞が使用されている点である。この「くる」という動詞は、何かの話者の方向に移動する際に使用される直示表現である。この場合では登場人物であるスタンリーに、刃先から振動が伝わっているのだが、その際に来るという動詞が使用されているのは、語り手が登場人物である Stanly の視点から主観的にその状況を描写しているということである。この例が示している通り、英語と日本語の語り手は同じ状況を異なる視点から描写する傾向があり、そのため使用される言語表現が異なるのである。英語の語り手は、状況をオフ・ステージから客観的に描写している一方、日本語の語り手はオフ・ステージから登場人物の視点に移動させることにより、その状況を臨場的に描写する傾向が強く、この傾向が原文の英語には使用されていない「来る」という動詞が頻繁に使用されることへとつながるのである。

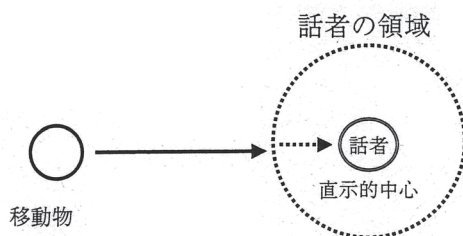


図2. 動詞「くる」のイメージスキーマ（坂原 1995）

大江（1975）は移動表現、授受表現、敬語表現などの様々な言語表現を分析し、日本語の表現を生み出しているのは、言い換えれば基盤になっているのは、主観性の概念であると指摘している。大江の主張は、英語の *come* と *go*、日本語の行くと来るという動詞は、話し手がオフ・ステージではなく、登場人物の視点から主観的に物事を描写しているという点である。つまり、これらの直示動詞を使用する際には、中立的、客観的な視点から移動の事態を描写することはできないということになる。一方、直示動詞ではなく移動の様態を表

す様態動詞を多用する英語は、移動事態を第三者の視点から捉えていると言える。

ある出来事を描写する際に、話者は客観的な視点、主観的な視点のどちらからでも事態を把握する事ができる。しかし、各言語にはその言語でより自然とされる好まれる事態把握の仕方や傾向があり、この視点の取り方が同じ出来事を描写する際にも、異なる言語表現となって実現される事につながるのである。英語では、オフ・ステージから客観的に物事を描写し、日本語は登場人物の視点から主観的に事態把握がなされ、この両言語の「好み」が表現方法の際を生み出すのである。

4. 実況中継における移動表現の日英比較

これまで、実験を通じた各言語における移動表現の分析、翻訳を通じた日英語の移動表現の比較を概観してきたが、本章ではサッカーの実況中継における移動事態の表現方法を分析する。これまで実況中継の分析は、Ferguson(1983)がおこなったスポーツアナウンサーの語りの特徴を語彙、統語、プロソディの観点から分析したものや、オリンピックの実況中継をフレームとアナウンサーと解説者の相互作用の観点から分析した三宅(2002)などがあったが、スポーツの実況中継における移動表現を分析したものはなかった。移動表現を比較する上で実況中継を使用する利点は、実験とは異なり、英語と日本語のアナウンサーが同じ事態をバイアスなく、無意識に表現しているため、より自然な移動表現と視点の取り方を比較することが可能となる点である。また人間の言語使用はその場の状況と発話者の意図、視点の取り方などの様々な要因により構成されている。これらのコンテキスト情報を除外した言語分析は不十分なものであるため、同じコンテキストに身を置いた際の言語表現の違いを分析することは重要なことである。このような状況において、同一の出来事を視聴者に伝達する際に、異なる表現方法が使用されるのであれば、それは有意義な言語的差異といえることができるだろう。

4.1 分析データ⁴

今回使用する実況中継は2013-2014シーズン、イングランド・プレミアリーグ、Chelsea FC対Cardiff City FCとManchester City対Manchester Unitedの2試合である。両試合ともNHK BS1で放送され、主音声日本人アナウンサーと解説者、副音声イングランドの現地のアナウンサー(2名)による実況中継と解説である。試合時間は2試合合計で187分(アディショナル・タイムを含む)である。

4.2 移動動詞の種類と使用回数

サッカーの試合は絶えず人間とボールが移動を続けている。この目の前で起こっている移動事態をアナウンサーはどのように表現しているのだろうか。Ferguson(1983)が指摘している通り、スポーツの種類によって独特の実況中継の言語表現が存在しているが、今回分析の対象にしたサッカーの試合でも同様の事が言える。サッカーの試合では人間もし

くはボールの移動が、全て移動動詞を用いて表されるのではなく、(17)のようにボールの移動に関与する選手名を単に列挙するのみの表現や前置詞句などが使用される。

(17) Mata, Ivanovic, Willian, now for Lampard, Ivanovic.

マタ、イヴァノヴィッチ、ウィリアン、ランパードへ、イヴァノヴィチ

表1は英語と日本語の実況中継において使用された様態動詞、経路動詞、直示動詞の使用回数である。表からもわかるように、同じ時間の出来事を描写する際に、日本語の方が使用されている移動動詞が多い。その理由として、日本語が動詞砕け言語であること、複合動詞を使用することが挙げられる。また、松本(2012)でも指摘されているように、日本語では英語と異なり、「飛び込んで行く」や「走り込んで来る」のように、様態動詞、経路動詞、直示動詞が文の中で対立せず共存できるため、動詞の使用回数が増加すると考えられる。

	様態動詞	経路(方向)動詞	直示動詞	合計
英語	142	97	123	378
日本語	56	276	228	654

表1. 日本語と英語の移動動詞の使用回数

この表が示している特徴的なことは、従来の研究が示している通り、英語は様態動詞を使用する頻度が高いが、動詞で移動の経路を表す傾向が低いこと、一方で日本語は様態動詞を使用する割合は低い、動詞で移動の経路を表す頻度が非常に高いことである。

(18) It's the first time they ventured forward.

(19) He drives across the ...

(20) Willian, here is Mutch, Odmwingie surging through the middle, and not many of those joining this attack.

(21) Taylor, Whittingham, Whittingham, Mutch, Campbell barging his way through, cleaned by Terry.

(22) カバーに入る。一人下がって、クロス入って、サイドを変えます。

上述した通り、日本語では様態、経路(方向)、ダイクシスの情報が動詞の形で共存でき、明白で認知的に無標である様態(例えば、サッカーの試合では「走る」など)は表現する必要性がないため、様態動詞が使用される傾向が低く、経路動詞と直示動詞が多用されると考えられる。一方で英語は目の前で起こっている移動事態の様態もあえて表現する傾向が強いことがわかる。

4.3 日本語と英語における直示動詞の比較—移動する視点と直示的中心

さらに日英語で顕著な差異が観察されるのが、ダイクシス情報を表す直示動詞の使用方法である。日本語では228回直示動詞が使用されているが、英語はその約半分の123回にとどまっている。松本(2012)の実験では日本語の被験者は直示動詞を多用することが示されているが、実況中継でも表2が示している通り、「来る」と「行く」という直示動詞が多用されている。

来る	行く	come	go
151	77	53	56

表2. 日本語と英語の直示動詞の使用頻度⁵

これらの動詞は、大江(1975)などが指摘した通り話し手がオフ・ステージではなく、登場人物の視点から主観的に物事を描写している動詞であり、解釈がその場に依存する表現である。Goと行くは話し手の領域もしくは話し手が置く視点から離れることを、comeと来るはそこへ移動することを表している。つまり、実況中継においてこれらの直示動詞を使用する際に、アナウンサーは無意識のうちに視点をその状況の中におき、当事者の視点から移動事態を表現しているということができよう。この傾向が日本語の方が高いという事ができる。以下の例を見てみよう。

- (23) 思案しながら縦パスを入れて、そこにエトーが降りて来て、サイドに流して、そこにウィリアムです。しかしそこにブロックをしいています。
- (24) Eto is trying to get through to Willian, blocked by Taylor.
- (25) 右サイドバック、イヴァノビッチ、長いサイドチェンジから、今マタが左に流れて行きました。

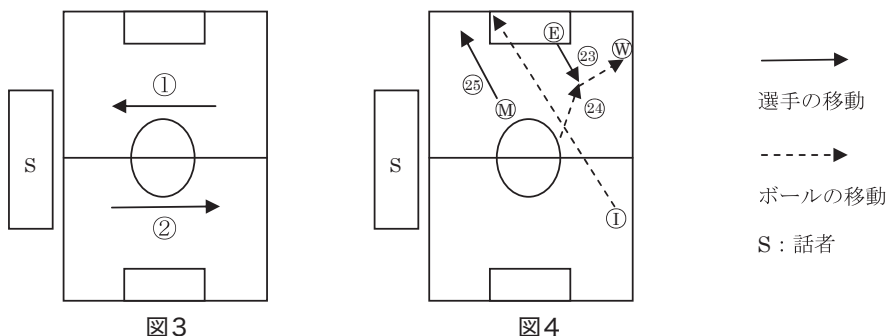


図3の①のように、実況席のあるメインスタンド方向への移動であれば直示動詞のcomeや来るが、それとは②のように反対側にあるバックスタンド方向へ遠ざかる移動であれば

goや行くが使用されるのは自然であるだろう。しかし図4の移動を表現した(23)ではエトー選手(図4Ⓔ)の移動は実況席に対してニュートラルな移動である(実際には少し遠ざかっている)が、日本語では来るという動詞が使用されている。つまり、アナウンサーの視点が置かれている直示的中心は移動し、そこから移動が描写されていることがわかる(図2参照)。一方、同じシーンを描写した(24)の英語では、直示的信息はなく、エトー選手Ⓔがウィリアン選手(図4⒠)に対してパスを送っていることのみを言語化している。

また、(25)ではイヴァノビッチ選手(図4Ⓘ)が自陣深くから反対側のサイドにロングボールを蹴り、マタ選手(図4Ⓜ)がゴール方向に走っているプレーだが、このシーンではアナウンサーは自陣に視点を置き、「行く」を使用して表現している。

次の例を見てみよう。このプレーはマタ選手(図5Ⓜ)がコーナーキックを蹴り、そのボールに対してペナルティーエリアの外にいたテリー選手(図5Ⓙ)がボールに対して移動し、ヘディングシュートを打った場面である。この事例でも日本語の直示的中心はペナルティーエリアの中に置かれ、(26)のように、二度「来た」という動詞が使用されている。一方英語の表現では(27)のように直示的表現は使用されていない。

(26) マタが入れて、ターゲット後ろから来たあつと。テリーでしたか、斜めに走り込んで来て、わずかにそれました。

(27) Juan Mata takes it (=corner kick) . John Terry dashed across, but it just veered wide.

このような直示的中心がピッチ内の様々な場所に移動し、選手の視点から描写されるケースが日本語では非常に多く観察される。以下はその中のいくつかの事例である。

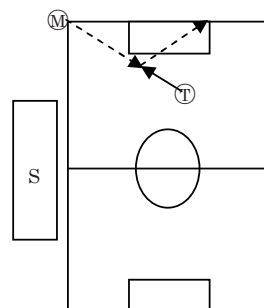


図5

(28) マタは①正面に入れてきました。②はね返してもう一度マタに戻る。③バートランドが左足のクロス、そしてここは縦パスを入れて、ここはまたつなく。ターンして、④アザール、アザール、狭いスペースに来た。倒れた。

(29) チェルシーのセットプレー、コーナーキック、飛び込んで来ましたが、

(30) クロスを入れるか、マタ、入れて来ました。

(31) スペースにイヴァノビッチが上がって来たか

(32) 右に回しました。そこにイヴァノビッチ、グラウンダーのパス中に入った。いい位置で受けて、ランパード、ついて行って、クロス来た。おっと、ゴールキーパーに戻りました。

(33) Lampard, lovely turn, and very composed Theophile Catherine. Well it's an excellent play from Theophile Catherine in a great bow from Frank Lampard.

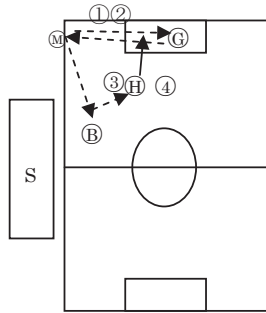


図6

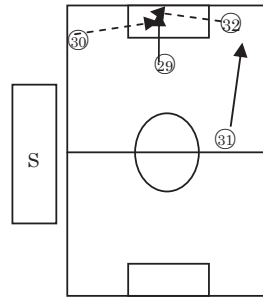


図7

図6は (28) の選手とボールの移動である。マタ選手 (図6Ⓜ) が上げたセンタリングである①のボールの移動と④のアザール選手 (図6ⓗ) の移動であるが、この二つの移動事態が直示動詞で表現されている。また、図7にあるように、(29) はメインスタンド側からのコーナーキックのボールに対してゴール前に走りこむ選手の移動、(30) はメインスタンド側からゴール前に入れたボールの動き、(31) は自陣のセンターサークル付近から相手陣内の右サイドへ移動する選手の動き、(32) はゴール前の選手にボールを合わせる動きをそれぞれ描写したものであるが、いずれも直示的視点がピッチ上の様々な箇所に移していることが分かる。(33) は (32) に対応する英語の実況であるが、直示表現は使用されていない。

4. 4 日本語における逆行構文の使用と視点の移動

直示動詞「くる」は典型的には話者は移動の到着点に位置し、移動物が話者の視点のある直示的中心に移動することを表すが、以下のような「てくる」の形をとる逆行構文でも頻繁に使用される。この逆行構文は、坂原 (2005) や古賀 (2008) など議論されているが、澤田 (2008 : 6) が述べている通り「話し手が (自己の心的領域に出現した) 主語の行為を自己に仕向けられた／仕掛けられた行為として心的に捉える事を表す」構文であり、実況中継の際にも多用される表現である。つまり、話者であるアナウンサーが選手の視点から行為を捉え、間接的に影響を受けているかのように表現している例である。

(34) 狙ってきましたか。ランパードが右足で狙ってきました。

(35) Frank Lampard. You can see what Frank's doing there. He is going for that far corner, he is not far away.

(36) イヴァノビッチ、狙ってきました。

(34) と (35) で表されているプレー (図8) は、ランパード選手①が、ピッチのメインスタンド側からゴールに向かって蹴ったフリーキック、つまり話し手であるアナウンサーから遠ざかるボールの移動を描写した表現である。ここでは「狙ってき

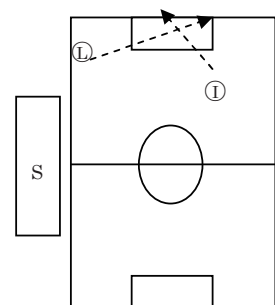


図8

した」という表現が使われているが、これは攻撃を受ける側の視点に立ち、あたかも主語のシュートに間接的に影響を受けているかのような表現方法となっている。一方英語では「フランク・ランパードのプレーが見えるだろう」と傍観者の視点を保ち、表現している。また次の文に直示動詞goが使用され、ファーサイドを狙ったと言っているが、この点からも話し手(アナウンサー)の視点が移動していない事がわかる。

4.5 英語における視点の移動と直示動詞の使用法

これまで日本語と英語の好まれる事態把握と移動表現について分析し、英語のアナウンサーは視点を移動せずに、客観的に試合を描写する一方、日本語のアナウンサーは状況の中に入り込み、選手の視点から移動事態を表現する傾向が強い事を確認してきた。日本語において直示動詞が多用される事は、ピッチ内で視点を自由に移動させ、直示的中心を移動させ、事態を描写する日本語の特徴が色濃く反映されたものであるだろう。しかし、以下の例が示す通り、英語の実況中継においても、直示動詞が使用されていること、言い換えれば、視点の移動が観察される。

(37) I don't think John Terry is aware that Gestede was coming in behind him.

(38) Eto, David Luiz for Ryan Bertrand. Now, Juan Mata, a quick exchange with Lampard, towards Willian, but Caulker saw it coming.

(39) Gunnarsson now, he just comes straight across him (=David Luiz) ...

(40) Cech, as you can see, the long ball comes up here, just routine clear up job for David Luiz here.

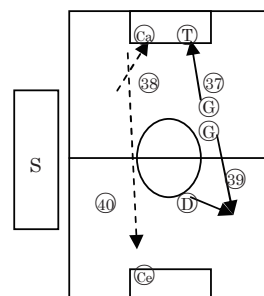


図9

(37) ではテリー選手①の方向へ移動したジェステデ選手②をテリー選手が気づいていない事を表現したものである。(38) ではコーカー選手③の視点からボールが移動してくることを、(39) はグナルソン選手④のドリブルをダヴィド・ルイス選手⑤がファウルで止めたプレー、(40) では相手ゴールキーパーから蹴られたボールの移動をチェフ選手⑥の視点から描いている。

このように、英語話者も積極的に選手の視点に立ち、直示的中心を移動しながら、移動を描写している事がわかる。2.2で述べた通り、松本(2012)は移動事態の言語化において、英語話者は場所の共有や移動者との相互作用などが無いと直示動詞は使用しないのではないかと指摘しているが、これらの例から、英語話者も常に視点を固定し傍観者の立場として移動を描写するのではなく、積極的に当事者の視点から物事をとらえようとする事が観察される。

5. おわりに

本稿はサッカーの実況中継を対象に、その中で絶えず起こっている移動事態がどのようにアナウンサーによって描写されるのか分析した。従来の実験調査と同じように、英語は移動の様態をあえて描写する傾向、日本語では無標である様態は言語化せず、経路動詞や直示動詞を多用する傾向が観察された。しかし英語の話者も自ら積極的に視点を移動させ、事態の中に直示的中心をおき、選手の視点から移動を描写している点も見られた。実況中継というものはFerguson (1983) も指摘しているように、視聴者との相互作用である。アナウンサーは視聴者がどのような情報を求めているのか常に考慮した上で、目の前で起こっている事に関する情報を提供している。視聴者は、またアナウンサーも、選手の立場からプレーを感じたい、選手と同じ視点からプレーを見たい、体験したいと思っており、その要求に応えるためにも、選手の視点から試合の流れを描写するのは当然のことだと考えられる。今後どのような時に英語話者が主観的把握を好むのか、視点を移動させ、その場の状況から臨場的に事態を描写するのかということの詳細に分析する必要がある。

注

* 本論文は、科学研究費挑戦的萌芽研究「英語学習における英語らしさの追求一事態把握の志向性に基づくライティング教育の提案」(課題番号23652146 研究代表者：谷みゆき)による助成を受けて執筆されたものである

- 1 松本 (2003) はTalmyの類型をさらに修正し、経路が主要部 (head) で表されるのか、非主要部 (non-head) で表されるのかにより、言語の移動表現を分類している。
- 2 Slobin (1996) は空間移動表現だけではなく、各言語におけるテンス、アスペクト、ヴォイスの使用方法について分析している。この論考の中で、Slobinは異言語間における子供たちの言語習得の比較を通じて、‘thinking for speaking’ という仮説、つまり話すことで形成される思考概念という仮説を提唱している。
- 3 この論考においては、移動動詞だけではなく、間投詞などの使用方法についても分析している。
- 4 2013-2014シーズン、イングランド・プレミアリーグChelsea FC (ホーム) 対Cardiff City FC (2013年9月22日、於:Stanford Bridge Stadium、3対1) とManchester City (ホーム) 対Manchester United (2013年10月22日、於:Etihad Stadium、4対1) である。実況は観客の歓声などで聞き取れない箇所もある。
- 5 この統計には“when it comes to premier league goals” や “you maybe got two and a half minutes to go” などの慣用表現や “majority of them will be going home happy” や “I think the game is gone for Cardiff now” などの試合の中の移動表現は除外している。

参考文献

Ferguson, C. A. 1983. “Sports Announcer Talk: Syntactic Aspects of Register Variation,” *Language in Society*, 12: 153-172.

- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京：東京大学出版会.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』東京：NHKブックス.
- 古賀裕章. 2008. 「てくる」のヴォイスに関する機能」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）『ことばのダイナミズム』東京：くろしお出版. pp. 241-257.
- 松本曜. 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」『日英比較選書6 空間移動の表現』東京：研究社. pp. 125-230.
- . 2012. 「移動事象の言語化における様態、経路、ダイクシス情報：通言語的実験研究から」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科講演会・HLC「言語と人間」研究会特別講演会資料.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究－主観性をめぐって』東京：南雲堂.
- 坂原茂. 1995. 「複合動詞Vてくる」『Language, Information, and Text』2. pp. 100-143.
- 澤田淳. 2009. 「移動動詞くるの文法化と方向付け機能—「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ—」『語用論研究』pp.1-20.
- Slobin, D. 1996. “From “thought and language” to “thinking for speaking”,” in Gumperz, J. and Levinson, S. (ed.), *Rethinking Linguistic Relativity*, 70-96. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, L. 1985. “Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms,” in Tom Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 3, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1991. “Path to Realization: a Typology of Event Conflation,” *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519.
- . 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. Vol.1. Massachusetts: MIT Press.
- 谷みゆき. 2012. 「移動表現に見る日英語話者の事態把握」『英語英米文学』第52集、中央大学英米学会. pp.93-106.
- Tani, M and N, Tataru. 2012. Motion-Event Constructions and Event Construals of English and Japanese Speakers. Paper presented at the 4th UK Cognitive Linguistic Conference, King’s College London.
- 多々良直弘. 2007. 「スポーツ・コメンタリー—メディアが創るスポーツという物語」『開放系言語学への招待』東京：慶應義塾大学出版. pp. 193-210.